

短期語学研修におけるコミュニケーション意識と イメージの変化

—ユタ大学夏期英語研修プログラムの事例—

徳井厚子 言語教育講座

1 はじめに

近年、多くの大学において海外での短期語学研修を実施するようになった。文部科学省の調査によれば、日本の大学生の主な留学先は、中国、韓国、米国、英国の順になっているという。近年アジア諸国に留学する学生が増加しているが、一方で、米国、英国などの英語圏に留学する学生数も依然として多い。では、このように短期間の語学研修は、参加者にどのような影響をもたらしているのだろうか。あるいはもたらさないのだろうか。特に、相手国（の人）のイメージ変化、コミュニケーション意識には、どのような変化が見られるのだろうか。本稿は、ユタ大学での3週間の英語研修プログラム（注1）の事前・事後アンケートを考察することにより、短期語学研修の意義を明らかにすることを目的とするものである。

これまで、異文化接触状況におけるイメージ変化については、幾つかの先行研究が見られる。岩男他（1988）では、在日留学生の日本人へのイメージ変化と在米日本人留学生の米国人へのイメージ変化について次のようなことを明らかにしている。在日留学生の日本に対するイメージが滞在期間が増えるにつれ、悪化していくのに対し、米国への日本人留学生の米国に対するイメージは、渡米してすぐは悪化するが、その後の好意的評価は安定しており、「期待通り」とする回答が過半数を占めるとしている。井上（2001）は、2カ月間行われた「世界青年の船」への参加者に事前、事後にイメージに関するアンケート調査を行い、顕著な変化の見られた事例を分析している。その結果、事前アンケートでは国のイメージが挙げられていたのに対し、事後アンケートでは個人名へと変化するケースが見られたこと、事前アンケートでは物が挙げられたのに対し、事後アンケートでは人が挙げられていたケースを挙げている。そして「これまでのステレオタイプが打ち砕かれ、新たに自分のセンサーでインプットされた情報でステレオタイプを構築していった」と述べている。

上記の報告と今回報告する1カ月の英語研修プログラムは、滞在国、滞在期間、滞在状況が厳密には同一ではない。しかし、上記の調査から、米国への短期語学研修の場合、アメリカ人に対して好意的な評価を持つこと、事前・事後アンケートに変化の見られることが予測できる。では、挙げられるイメージの捉え方は研修の事前・事後で具体的にどのような変化が見られるのだろうか。本報告では、イメージ変化を具体的に考察していくと共に、コミュニケーション意識の変化についても考察し、短期語学研修の参加者に与える影響を明らかにし、この2つの観点から本研修の意義を明らかにする。

2 調査目的・方法

調査の目的は以下の通りである。

- 1) 研修事前、事後の米国人へのイメージ変化について調べ、どのような変化が見られたかについて

て明らかにする。

2) コミュニケーション意識(コミュニケーション不安) についての変化を明らかにする。

調査方法は、アンケートという方法を行った。まず1) のイメージ変化については、あらかじめイメージの項目を設定せず、自由連想法を用いた。この方が参加者にとって思い浮かんだイメージを自由に記述することができるのではないかと考えたためである。コミュニケーション不安については、外国人と話す時の心理状態について「ストレス」「落ちつき」「不安」「苛立ち」「心配」の5項目のそれぞれを4段階尺度で回答を行うようにした。また、この他に心境については自由記述式による回答を行うようにした。

米国到着翌日、帰国前日にそれぞれアンケートを行った。アンケート内容については、参考資料を参照されたい。

3 調査結果

3-1 米国人へのイメージ変化

調査結果を項目全体という全体的な視点から及び顕著な例という個別の事例から見ていくことにする。

3-1-1 全体的な視点から

参加者より挙げられたイメージを項目毎に分け、事前、事後にどのような変化が見られたのかについて、まず、全体的な視点から見ていくことにする。以下では(1) 肯定的、否定的イメージの変化(2) 事前アンケートのみに見られた項目の特徴(3) 事後アンケートのみに見られた項目の特徴という観点から見ていく。

3-1-1-1 肯定的イメージ・否定的イメージの変化

事前・事後アンケートを比較すると、肯定的イメージの項目の出現は事前(32回)→事後(52回)へ増加が見られ、否定的イメージは事前(14回)→事後(7回)へと減少が見られた。研修を通じてアメリカ人のイメージが肯定的イメージが増加し、否定的イメージが減少したことがわかる。

次に、項目別に見ると事前アンケートで最も多く見られたのが親切(7)、陽気(5)、明るい(3)であり、事後アンケートは、親切(7)、明るい(4)、フレンドリー(3)、優しい(3)であった。陽気の項目が減少し、フレンドリー、優しいという項目が増えている。

3-1-1-2 事前・事後アンケートに見られた項目の特徴

A 事前・事後の双方に見られた項目

事前、事後の双方とも1回ずつ見られたのは「自由」「活発」「気さく」「オープン」「積極的」「よく話す」であった。これらの項目は、強烈な印象ではないが、ほぼ期待通りであったことを示している。

事前から事後でやや増加した項目として「親切」(7→9)、「明るい」(3→4)、「やさしい」(1→3)が挙げられる。「親切」は事前にも最も多い項目として挙げられたが、事後にも更に多く挙げられており、参加者にとってアメリカ人の印象形成に最も影響を与えていることがわかる。また

「明るさ」「優しさ」も増加している。

事前から事後に減った項目として「陽気」(5→2)が挙げられる。これは事前で2番目に多い項目として挙げられていたが、実際に生活しそれほどでもないという印象を持ったということがいえる。

B 事前アンケートのみに見られた項目の特徴

事前アンケートのみに見られた項目をカテゴリー分けしたところ、「外見で捉える傾向」「集団、国、民族として捉える傾向」「相手に対する自己の感情」に分けられた。このそれぞれについて見ていく。事前アンケートのみに見られた項目には、相手の生き方、態度、人生観に関する項目はほとんど見られなかった。

a 外見で捉える傾向

事前アンケートのみに見られた傾向として「背高い」、「笑顔すてき」、「かっこいい」のように外見を表現する項目が見られた。ただし「大きい」は4→7と事後更に増加している。このことは、異文化接触の際、最初は内面よりも外見から印象を形成する傾向があることを示しているといえよう。

b 集団、国、民族としてのイメージで捉える傾向

事前アンケートのみに見られた項目に、次のように社会、民族、国としてのイメージとして捉える項目が見られた。「銃社会」「犯罪多い」「白人至上主義」「障害者特別視しない」「自ら国をたてた」「O型」「いろいろな人種がいる」である。実際にその国の人々と接触する前には、個人としてよりもこのようにカテゴリー化した集団として捉える傾向にあることを示している。

c 相手に対する自己の感情で捉える傾向

事前アンケートには「近寄りがたい」、「こわい」といった相手への恐怖心や相手への距離感を示す項目が見られた。特に恐怖心は4名見られた。実際にその国の人々と接触する前は、このような感情を抱きがちであることを示しているといえる。また「他人」という項目も見られた。これは相手に対して非常に遠い存在として捉えていることを示している。

C 事後アンケートのみに見られた項目の特徴

事後アンケートのみに見られた項目を分類したところ、事前アンケートのみに見られた「外見で捉える傾向」「集団、国、民族として捉える傾向」「相手に対する自己の感情として捉える傾向」はほとんど見られなかった。外見は「表情豊か」という項目が一回みられたが、より具体的に変化している。

事後アンケートでは、個人の「生き方」「考え方」として捉える傾向が見られた。3週間の滞在を通して相手を集団としてよりも個人として捉えるようになり、さらに外見よりは個人の内面を捉えるように変化している。集団として画一化されたイメージが崩され、個人として相手を捉えるようになったプロセスが窺える。また、多様性、共通性に言及する回答も見られた。個人としてつき合うことで多種多様な考え方があることを知り、簡単にステレオタイプで捉えてしまうことの限界を感じていることの現れとみられる。

a 個人としての生き方で捉える傾向

個人の生き方としては「努力」「まじめ」「勤勉」が事後アンケートに見られた。これらは全く事前アンケートに見られなかった項目であるが、実際に米国の大学で生活することによってこれまでの米国人のステレオタイプが崩され、自らの経験により新たに構築されたステレオタイプと考えることができよう。また「夫婦仲」「家族仲よい」「日々楽しむ」「けじめある」「ゴミ分別しない」のように日常的なレベルでの個人の生き方を言及する回答も見られた。実際に日常生活に触れることによってよりイメージが具体的になったと考えることができる。

b 個人としての考え方で捉える傾向

「自分を持っている」「排他的ではない」のように個人としての考え方に触れる回答も見られた。実際に教師や学生たち等と直接に接触し、様々な意見を交換することによってこのような印象が形成されたと考えることができる。

c 多様性、共通性に言及

また、共通点や多様性に言及する回答も見られた。例えば「日本人と変わらない」「同じ人類」といった共通点に言及する回答、「人それぞれ」「多種多様」と多様性に言及する回答である。相手の特徴をひとつくりにした項目を挙げるのではなく、このように共通性や多様性を挙げる回答が複数見られたことは興味深い。相手を画一化したステレオタイプとしてとらえるのではなく、個人の持つ多様性、自己との共通性という点で捉える重要性に気づいたと考えられよう。

3-1-2 顕著な事例について

アンケートの回答のうち、個別の事例として顕著な変化が見られた事例を挙げる。

事例1

事前：陽気、ジェスチャー大きい、自立、障害者特別視しない、犯罪多い

事後：明るい、オープン、自分の意見持つ、フレンドリー、けじめある

事例2

事前：friendly, ,humorous, big, こわい, cute

事後：humorous, friendly, big, 夫婦仲良い, 家族仲良い

事例3

事前：積極的, friendly, 親切, 他人, 体格いい

事後：陽気, 親切, 日本人と変わらない, パワフル, 勤勉

事例4

事前：背が高い, いろいろな人種, 親切, お金持ち, 陽気

事後：親切, 陽気, 表情豊か, よく食べる, ゴミ分別しない

事例5

事前：豪快, 陽気, おおざっぱ, O型, 白人至上主義、

事後：多種多様, 様々な時代背景, さりげなくやさしい, 大きい, 同じ人類

事例1は、事前では「障害者特別視しない」「犯罪多い」と国のイメージで捉えている傾向、ジェスチャー等外面的な面を捉えている傾向が見られたが、事後では、個人で捉える傾向へと変化し

ている。国のイメージから個人としてのイメージへ捉え方が変化したケースである。事例2は、英語で書いているケースである。事前は「こわい」というネガティブな項目が見られたが、事後にはネガティブな項目は消え、夫婦仲、家族仲の良さを挙げる等具体的に言及する項目が見られた。最初は恐怖心を抱いていたが、実際の接触を通して出会った人達のライフスタイル等に触れ、イメージが具体的なものへと変化したケースと考えられる。事例3では、事前に「他人」という項目が見られたが、事後には消え、その代わりに「日本人と変わらない」という項目が見られた。滞在を通して米国人を他者と捉えていたのが、自分と変わらない存在であり、相手との共通性に気づいたケースであると言える。相手を他人として見なし、違いを防衛しようとする段階から、相手との共通点にも気づき、違いを最小化していく段階へと変化したと言える。事例4は、事前では「背が高い」「お金持ち」等表面的な面で捉える傾向が見られたが、事後では「よく食べる」「ゴミ分別しない」等、日常的な面に視点を交換させて捉える傾向に変化している。実際に生活する過程で、相手を捉える視点が変化したケースと言える。事例5は、事前では「0型」「白人至上主義」のようにステレオタイプで捉える傾向が見られたが、事後では多様性、共通性（同じ人類）で相手を捉えるように変化している。相手をカテゴリー化せず、個々の多様性、自己との共通性で捉えるという視点への変換が見られる。

3-2 コミュニケーション意識の変化

3-2-1 アンケートから

1カ月の研修でコミュニケーション意識はどのように変化しただろうか。

コミュニケーション意識については、外国人と話す時の心理状態について「ストレス」「落ちつき」「不安」「苛立ち」「心配」の5項目をそれぞれ4段階尺度で行った。その結果は以下の通りである。1, 3, 5は数値が高いほどコミュニケーション意識が肯定的であることを示し、2, 4はその逆を示している。

参加者全員の事前、事後の数値を合計したところ、以下の通りになった。

1 外国人と話すとき私はストレスを感じる	事前37→事後45 (+8)
2 外国人と話すとき私は落ちついている	事前51→事後32 (-19)
3 外国人と話すとき私は不安を感じる	事前25→事後39 (+14)
4 外国人と話すときいらいらしない	事前33→事後27 (-6)
5 外国人と話すとき私は心配事が多い	事前28→事後41 (+13)

これを見ると、外国人と話す際に、ストレス、不安や苛立ち、心配が減少し、落ちつきが増加したことがわかる。変化の差をみると、最も顕著な変化が見られたのは、落ちつきの項目であり、次いで不安、心配、ストレス、苛立ちの項目の順となっている。一ヶ月の滞在で外国人と話す際に「落ちついて話せるようになった」「不安を感じなくなった」ことが最も大きな収穫となったことが判明した。これらのことは、外国語を話す際の自信へとつながり、更に自信がコミュニケーション能力の向上へと結びつくのではないかといえよう。

3-2-2 記述式アンケートより

自由記述式アンケートに書かれた文章から、参加者の心情が現れている表現（単語）を抜き出し

た。その結果、事前アンケートには、不安(5) 心配(3) 緊張(1) こわい(1) 自信ない(1)のようなネガティブな感情を示す記述が見られたが、事後アンケートには、これらの記述が全く見られなかった。以下に事前、事後アンケートに見られた記述例を示す。

A (事前) ネイティブの人と話すことが時々あるがとっさにいい英語が出てこないのが、とても悔しいです。無意識のうちに緊張してしまうのだと思います。何とかしたい！不安もありますがとても楽しみです。

(事後) これほど内容の濃い3週間を送ったのは初めてだ。毎日がとても楽しく充実していたのでとても早く時が過ぎた。英語の方もここに来たばかりの時に比べればずいぶん聞き取れるようになった。この英語研修で得たことの中で最も大切なことは英語をもっと知りたい、勉強したいという意欲だ。

B (事前) ほとんど話せないのが心配ですが、わからないなりに発言してがんばろうと思います。

(事後) 最初のうちはアメリカ人に話しかけるのに勇気がいたりしたけれど、最近は何のためらいもなく話しかけられるようになりました。言っていることもだんだんわかるようになってきましたが、ネイティブ同士で話している時やぼそぼそ話す時はわからないことが多いです。ここに来て英語の必要性を強く感じました。

C (事前) 外国人にたくさん話しかけられたのに全然聞き取れないし、話せないから全くコミュニケーションがとれないのが本当に悔しくて残念。授業についていけるかも不安。

(事後) ここに来てアメリカ人だけではなく、他のいろいろな国の人とふれあい、様々なことを少しずつ知って視野が広がった気がします。以前は外人といったら遠い存在で関係など全然なかったのですが今は外人といっても他の日本人と変わりなく近い存在に感じられるようになったことがとても嬉しい。

D (事前) 私は英語が全くダメです。でも嫌いなわけではなく、話せるようにはなりたいたと思います。

(事後) 最初来た時には英語にはとても苦労しました。外人を見るだけで緊張して何を話したらいいかわからなくなりました。でもだんだん慣れてきて緊張しなくなりリスニングもだんだんできるようになりました。外国人に対する抵抗がなくなってよかったです。

E (事前) 外国に来ることも何もかも初めてでわくわくしています。まわりに外国人ばかりいるということにまず感動しています。

(事後) 話しかけられたりするのになれてきたと思います。ヒアリングにもだいぶ慣れてきました。私は自分の英語に自信がなく話すのにも控えめだったけれど、単語でも少し文法が違って通じるんだということがわかり勇気もわいてきました。

F (事前) 楽しみな反面不安も感じている。せっかくのチャンスをいかしていろいろなことにチャレンジしてみたい。

(事後) この3週間はいろんな意味で自分を試すよい機会であったと思う。何でも質問することがその体験をより自分にとって有効で、何よりその経験を忘れずにいられることを改めて気づかされた。学校生活においても日常生活においても大切なことだと感じた。

これらの事例から、最初は外国語を話す際に不安、緊張していたのが、次第にコミュニケーションすることに自信がつき、更に今後の英語の勉強への意欲と変化していったプロセスが窺える。1カ月という短期間であるが、実際に現地で生活し、コミュニケーションすることにより、コミュニ

ケーション意識が変化したということができよう。

4 まとめ-英語研修の効果と課題-

以上、本稿では英語研修の事前、事後アンケートの報告を行った。アンケートの結果、米国人のイメージが否定的なものから肯定的なイメージへと変化が見られた。また、事前アンケートでは相手の捉え方が「外見で捉える傾向」「集団、国、民族として捉える傾向」「相手に対する自己の感情として捉える傾向」が見られたのに対し、事後アンケートでは「(個人としての)相手の生き方、態度、人生観として捉える傾向」「多様性に言及する傾向」が見られる等、相手のイメージの捉え方に変化が見られた。1カ月の研修生活を経て、このように相手のイメージを捉える視点に変化が見られたことは、本研修が語学能力の向上だけではなく、異文化間能力の育成と言う意味でも重要な意味を持つことを証明しているといえよう。

また、コミュニケーション意識のアンケートからは、外国人と話す際のストレス、不安や苛立ち、心配が減少し、落ちつきが増加したことが判明した。特に、落ちつき、不安を感じなくなったという項目に顕著な変化が見られた。外国人と話す時に不安を感じず、落ちついて話すことができるようになることは外国語を学ぶ上で極めて重要な面である。研修生活を経てコミュニケーション意識に肯定的な変化が現れたことは研修の効果と捉えることができよう。

1カ月という期間は非常に短期間である。しかし、短期間にせよ、実際に現地で生活することはコミュニケーション意識、異文化間能力という観点からも効果があるということがアンケート結果から判明した。今後の課題としては、事前オリエンテーションの充実、米国人(学生)とのインターアクションの機会の増加、研修後の交流の継続等が挙げられよう。今後更にプログラムが充実していくことを祈りたい。

謝辞：本プログラム遂行にご尽力された関係者の方々に感謝の意を表します。

注

1 本報告の対象とする英語研修は、信州大学と交流協定を結んでいるユタ大学との交流の一環として行っているものである。英語研修プログラムは1999年度より年一回行われている。

尚、当報告の研修は、2000年9月8日～27日にかけてユタ大学ELIで行われたものであり、参加者は17名である(男性2名、女性15名)。プログラムは、教室内での英語学習の他、コンピューター教育、体験学習(小学校訪問、シニアシチズンセンター訪問等)を含んでいる。尚、研修期間中参加者は学内の寮に滞在し、ルームメートは参加者同士であった。

参考文献

- 井上孝代(代表)2001『世界青年の船事業における異文化接触経験への援助に関する実験臨床心理学的研究』平成11・12年度文部省科学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書。
岩男寿美子・萩原滋1988『日本で学ぶ留学生-社会心理学的分析-』劉草書房。
Bennett,M. 1993 Towards ethnorelativism: A Developmental model of intercultural sensitivity. *Education for the intercultural experience*. Yarmouth,ME: Intercultural Press.
Rubin,R.1993 *Communication Research Measures*. NY: The Guilford Press.

資料

事前アンケート

氏名

これまで外国に行ったことはありますか？

1 国名

2 期間

1 あなたにとって米国人はどんなイメージがありますか？思いつくままに5つ挙げてください。

() () ()
() () ()

2 次の項目についてあてはまるものはどれですか？

1 とてもそう思う 2 まあまあそうである 3 そうではない 4 全然そうではない

1 外国人と話すとき私はストレスを感じる ()

2 外国人と話すとき私は落ちついている ()

3 外国人と話すとき私は不安を感じる ()

4 外国人と話すときいらいらしない ()

5 外国人と話すとき私は心配事が多い ()

3 今の心境について自由に書いて下さい。

4 この英語研修でどんなことを期待しますか？

